

## 令和七年度 お茶の水女子大学 文教育学部

## 学校推薦型選抜 高大連携特別選抜 試験問題

## 言語文化学科（日本語・日本文学プログラム）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私たちの使っている言語は、実はとても不完全なものではないか。そんなことを考えたのは、ベセスダ・ソフトワークス（以下「ベセスダ」）が二〇二三年に出した新作ゲーム *Starfield* の日本語版をプレイしていたときのことだった。

ベセスダはアメリカの会社だが、最近アメリカやヨーロッパで作られる大作ビデオゲームは、人種的マイノリティや性的マイノリティの人々の存在を反映し、いわゆる「多様性を尊重した」作品を目指す傾向がある。ベセスダも、以前から主人公と同性のキャラクターとのロマンスが体験できるなどといった面はあったが、*Starfield* ではさらにそれを意識的に発展させているようで、アフリカ系やアジア系のキャラクターも多いし、メインキャラにも脇役にも同性のパートナーを持つ（持っていた）人物が登場する。そしてこうしたゲームは、プレイヤーが操る主人公キャラクターを生い立ちから外見、声に至るまで自由に作れることが多いのだが、*Starfield* ではなんと使用する人称代名詞まで選択できるようになっている。それにより、外見上のジェンダーと当人が望む代名詞が一致しない主人公を作ることまでできるのである（そして作中で外見上のジェンダーを変更することで、疑似的な性別移行も実現できる）。しかもその代名詞の選択肢には、「単数の they」と呼ばれるものも含まれていて、性別二元論的でない呼ばれ方をするこゝろでできる。

この単数の「they」が問題なのである。*Starfield* を買ってうきうきと起動し、主人公キャラクターを作成していて代名詞の選択が可能だと知り、私はかなり気持ちが高揚した。メジャーな会社を作る大作ゲームで、そんな設定ができるものをプレイしたことがなかったのだ。そしていよいよ代名詞を選ぼうというときに私の目に飛び込んできたのは、こんな選択肢だった。「彼」、「彼女」、「彼ら」。

「いや、『彼ら』は違うでしょー」と頭のなかでツツコミを入れてしまう。「単数」なんだから、あくまでそのひとは単体なのであって、別に群体で生きているわけではない。でも、こゝでふと思ったのだ。「だったら、どう訳したらよかったのだろう？」と。

単数の「they」は古い英語にも見られたようだが、現在のようにジェンダー中立的な仕方で特定の個人を指す用法は比較的最近のもので、二〇一五年にアメリカ方言学会の「今年の単語」に選ばれている。私自身も「若いころにはなかった」という感覚が強い。一五年ほど前の大学院生時代には英語の文章を書くときにそうした言葉を用いた記憶はなく、英文校正でもジェンダー非特定の代名詞を使いたいときには「she/he」や「s/he」を使うよう言われていた。一〇年くらい前、単数の「they」を目にするようになったころに論文で使ったところ、「論文ではこういう言葉遣いはしない」と修正された覚えもある。ところが四〇五年前には、論文中の「she/he」を「こゝ」は『they』でもいいですね」と直されるようになっていた。

この単数の「they」が日本でも知られるようになったとき、「これをどう訳すべきか」ということが英語を訳す機会のある人々のあいだで話題になったと記憶している。私は専門の翻訳者ではないので、プロがどういった話をし、どういった翻訳をしてきたのかはわからない。ただ、私が見ていた範囲だと、「日本語は主語や目的語を明示しない文を作りやすいから、代名詞を落として訳したら自然な日本語文になる」とか、「日本語だと固有名を繰り返して使っても不自然ではないから、固有名を使って訳したらいい」といった意見が主流だったように思う。「Let me introduce Ellis. They are a philosopher.」だったら、「こゝちはエリス。哲学者です」や「エリスを紹介しま

す。エリスは哲学者です」とすればいい、といった具合だ。

確かに多くの文はこれで自然に訳せるのだろう。ただ、そのころから現在に至るまでに、英語での単数「they」の使われ方もちよつとずつ変わってきているように思える。例えば、最近の小説や漫画を読んでいると、「I am Ellis, They/them.」というふうには、名前を言ったあとに代名詞を付け足していることがある。要するに、自己紹介のときに「私には they/them を使つてね」、「私は they/them を好む人間です」といったことを伝えているのだ。さらに、人物紹介のプロフィールとして代名詞が記載されることも増えている。有名なところだと、Netflix のドラマ版 *ONE PIECE* の出演者一覧には代名詞が記載されていた。アメリカ哲学会で「名札に貼ってください」と代名詞シールが配布されたこともある。

こんなふうには自分やほかの誰かのプロフィールの一部として代名詞を示すやり方は、「日本語だと主語や目的語を明示しなくても文を作れる」といった方法で対処できるようなものではない。はっきりと「they」に当たる代名詞を日本語でも用意しないと、どうしようもないように思える。

場合によっては、「she/he/they」を「女性／男性／ノンバイナリー」と訳して済ませていることもある。けれど、代名詞の選択とジェンダーアイデンティティは必ずしも一致しているわけではないというのも重要だ。ノンバイナリーでも「she」を好むひとはいるだろうし、バイナリーな女性や男性であっても、言語に組み込まれた性別二元論に抵抗するためなどのさまざまな理由で「they」を用いるひとはいる。「he でも they でもいい」というひとだっている。傾向としてノンバイナリーの人々はジェンダーニュートラルな代名詞を好むことが多く、それ以外の人々はジェンダー特定の代名詞を使うことが多いというのは言えるにしても、あくまで代名詞は代名詞であつて、そのひと自身のジェンダーアイデンティティとは厳密には別の話なのだ。

単数の「they」がこのように使われるようになる過程で、英語という言語は変化を遂げたのではないかと感じる。それ以前の言語においては想定されていなかった人間を語れるようになり、自分自身のプロフィールの一部として代名詞を伝えるという新しい実践が可能になった。逆に言えば、それ以前の英語はそうした語りや実践ができない言語だったのであり、だからこそ、ときに「文法的におかしい」といった非難（があつたと記憶している）を受けながらも単数の「they」を地道に使い続けることで、言語そのものを変革する必要があつたのではないだろうか。

「日本語だったら主語や目的語を落として自然に訳せる」のような考え方は、たぶん翻訳テクニクとしては間違っていないのだと思う。翻訳は、たいていの場合読みやすい自然な訳文を目指すのだろうから。ただ、「自然な表現」を目指すというのは、それまでの日本語と変わらない日本語を維持し続けるということなのではないだろうか。従来の日本語文に落とし込めるからこそ、私たちはそれを「自然」と感じるのではないか。だとすれば、私も含め多くのひとは、日本語のほうは変革しないままにしながら、変革されつつある英語をうまく日本語に置き換えるということを目指してしまつていたのではないか。

そんなふうにかえるとき、前提となつていのは「日本語という言語はすでに十分にさまざまな状況を記述するリソースを備えている」という見方ではないだろうか。日本語には十分なリソースがあるはずだから、英語の文を訳すときには、その文が表す状況を記述するような日本語文を探せばいい。「They are a philosopher.」を「哲学者です」と訳すように。でも、英語で代名詞をプロフィールの一部として用いるようになるなかで、日本語にはそうした実践を支えるリソースが足りていないことが露わになりつつあるのかもしれない。*Starfield* で「they」が「彼ら」と訳されたのは、必ずしもこのゲーム自体のローカライズの問題ではなく、代名詞の紹介に対応するような日本語での実践を、私たちが作り出せてこなかったことからの帰結なのだ。

まったく異なる文脈でだが、言語行為論の創始者ジョン・L・オースティンは一九四〇年の草稿「語の意味」のなかで、私たちの用いる日常言語はときに破綻するという話をしている。そこで話題になつていのは分析性と総合性の区別だ。

「独身者は結婚していない」のように、そこに含まれる言葉の意味だけから真であると導かれるような言明を「分析的に真」と言う。これに対し、「カエサルはルビコン川を渡った」のように、そこに含まれる言葉の意味だけでなく、事実が実際にどうであるのかにもその真理性が依存しているような言明を「総合的に真」と言う。逆に言葉の意味だけからどうしたって偽であるような言明は「分析的に偽」、事実には照らして偽であるような言明は「総合的に偽」と言ったりする。

当時の分析哲学界では、どんな言明も分析的に真、分析的に偽、総合的に真、総合的に偽のいずれかに分類できると信じるひとが多かった。けれどオースティンは、実際に私たちが使っている日常言語ではそんな分類は必ずしも成り立たないと指摘する。例えばいままさに騒音を聞いているさなかに「この騒音は存在する」と言ったとき、この言明は分析的に真なのだろうか、総合的に真なのだろうか？ 一部の哲学者はこの言明があまりに疑いなく正しいことからこれを分析的に真だと見なすし、他方でこれが偽になる状況は想定可能であることからこの言明を総合的に真だと見なす哲学者もいる。オースティンは、そもそも真なる言明を分析的か総合的に必ず分類できるという哲学者たちの発想を問題視する。理想的な言語であれば確かに常にそうした分類が成り立つのかもしれない。けれど、私たちが普段使っている言語は理想的ではなく、例外的な状況を前にと破綻する、というのだ。そして日常言語が理想的な言語であるかのように語るのは間違っている、とオースティンは論じる。

ぜんぜん違う話題ではあるけれど、<sup>(1)</sup>私はオースティンのこの考え方に強く惹かれる。私たちの言語は理想的ではない。それはつまり、理想的な言語であれば成り立っているかもしれないことだって、私たちの現在の言語では成り立っていない可能性がある、ということだ。分析的／総合的という区別が必ずしも私たちの言語で常に成り立つわけではないように、あらゆる状況が必ずしも私たちの言語ですでに記述可能であるわけではない。私たちはいつだって不完全な言語とともに生き、それを使ってコミュニケーションを取っている。

だから、言語は絶えず改定していかなければいけないのだ。私たちがいま使っている日本語は、性別二元論をはみ出るような実践を支えるリソースを十分に備えていない。だとすれば、「自然な日本語」を維持するのではなく、むしろ新たな実践、新たな記述を可能にすべく、「これまでの日本語に照らすと不自然な言い回し」を探り、それをあえて使って、日本語を変革していく必要があるのではないだろうか。

このことを強く意識したきっかけは単数の「they」だったが、これは性的マイノリティに関する領域に限られた話でもないだろう。私たちが直面する状況、私たちが抱いている気持ち、私たちがおこないたい実践、そのありとあらゆる場面にわたって、きつと私たちのこの言語は理想に達していない。そのために、私たちはしばしば自分が経験したことを伝える言葉を見出せず黙り込んだり、自分のうちにある気持ちがまるで存在しないもののように扱われたりといった経験を<sup>(2)</sup>する。新しい言語実践が常に必要なのだ。

(三木那由他『言葉の道具箱』による。一部の文章を改変した。)

問一 傍線(1)「私はオースティンのこの考え方に強く惹かれる」とあるが、なぜ筆者はオースティンの考え方に強く惹かれるのだと考えられるか、簡潔に説明せよ。

問二 傍線(2)「新しい言語実践が常に必要なのだ」とあるが、あなた自身が考える現代日本語の「新しい言語実践」について、具体例を挙げつつ五〇〇字程度で自由に論ぜよ。

(問題以上。答案用紙のみ提出のこと)